

ドイツ中等地理教科書における導入単元の特質

ーラインラント＝プファルツ州地理教科書 *TERRA Erdkunde Gymnasium* の分析ーCharacteristics of Introductory Unit in Secondary Geography Learning in Germany : An Analysis of the Textbook “*TERRA Erdkunde Gymnasium*” for Rhineland-Palatinate

阪上 弘 彬*

SKAUE Hiroaki

ドイツの地理教育において「空間」は重要なテーマであり、「空間に関連した行動コンピテンシー (raumbezogene Handlungskompetenz)」の育成という地理学習の目標にも大きく関係する。本稿の目的は、ドイツ・ラインラント＝プファルツ州における中等地理教科書 *TERRA Erdkunde Gymnasium* の導入単元「自身の位置を確かめる (sich orientieren)」の分析を通じて、中等地理学習の導入単元の特質を明らかにすることである。分析の結果から以下の5点が特質として指摘できる。1つが地理学習の意義を学ぶ機会が設定されていること、2つが地理的技能の習得と地誌的な知識の獲得が組み合わされた単元構成になっていること、3つが学び方を学ぶ小単元が設定されていること、4つが空間を捉えるための捉え方や方法を学ぶことが意識されていること、5つが多様な空間スケールを一つの単元内で扱う構成になっていること、である。

キーワード：中等地理学習、空間、学習方法、導入単元、ドイツ

Key words : geography in secondary education, space, learning method, introductory unit, Germany

I はじめに

地理教育の数ある目標のなかに、空間認識の形成が挙げられる(例えば、寺本 1995; 伊藤, 1998, 2006; 齋藤, 2003)。阪上ほか (2020) が指摘するように、日本の地理教育では空間認識形成にむけて地図学習の充実がなされてきた一方で、海外の地理教育に目を向けると空間認識の目的を市民的資質の育成から捉えて、子どもに指導しようとする動きがみられる。本稿で取り上げるドイツ連邦共和国(以下、ドイツとする)の中等教育¹⁾における地理²⁾は、「空間というカテゴリーに従事する教科目」(服部, 2007, p.126; DGfG, 2017, S.6)であり、授業の目標として「地球上のさまざまな空間における自然的状況と社会的活動の間にある関連への認識とそれにもとづく空間に関連した行動コンピテンシー (raumbezogene Handlungskompetenz)」(DGfG, 2017, S.5)の育成を掲げる。前述のように、空間認識を踏まえた市民的資質の育成を意図したものといえる。このような目標は、ドイツ地理学会 (Deutsche Gesellschaft für Geographie, DGfG) が作成した『ドイツ地理教育スタンダード』および各州地理カリキュラムにおいても示されるとともに、この目標に基づいて空間に関するコンピテンシーおよび学習内容³⁾がカリキュラムでは配置されている。学習者に「地球上のさまざまな空間における自然的状況と社会的活動の間にある関連への認識とそれにもとづく空間に関連した行動コンピテンシー」の形成を促すために、中等地理学習の入口に位置づく第5学年の最初の単元、言い換えれば中等地理の導入単元

では、「空間」をどのように教えているのだろうか。

ドイツではコンピテンシー志向のカリキュラム・授業が導入され、学習の成果(出口)に関する議論が集中しているが、資質・能力の育成が掲げられた日本の地理教育においても学習成果や高等学校における地理科目のあり方に関する議論が展開している。本稿は日本の地理教育に対する直接的な示唆を得るものではないが、ドイツの中等地理学習の導入(入口)においてどのような地理学習が設定されているのかを把握することは、日本の空間認識やその指導、地理教育のあり方を考えるにあたり重要な手がかりになると判断できる。

本稿の目的は、ドイツ・ラインラント＝プファルツ州 (Rheinland-Pfalz; 以下 RP とする) における中等地理教科書 *TERRA Erdkunde Gymnasium* (以下、*TERRA* とする) の導入単元「自身の位置を確かめる (sich orientieren)」の分析を通じて、中等地理学習の導入単元の特質を明らかにする。まず II において、教科書の内容構成を規定する指針の一つである RP 州カリキュラムを取り上げ、そこでの「空間」の扱いについて整理する。III では導入単元「自身の位置を確かめる」の概要を示し、IV においていくつかの小単元を取り上げて、「空間」に関わる教授・学習過程を明らかにする。これらの検討を踏まえて、V では特質を整理する。なお RP 州における中等教育前期 (Sekundarstufe I) では、地理 (Erdkunde)、歴史 (Geschichte)、そして日本の公民に相当するゾチアルクンデ (Sozialkunde) が統合された社会科学科 (Gesellschaftswissenschaftliche Fächer) が設定されている。

この点を踏まえて, RP州を選択した。

II ラインラント＝プファルツ州の社会科学地理カリキュラムにおける「空間」の扱い

社会科学科全体では, 民主主義コンピテンシーを最上位コンピテンシーとして, ドイツが定めた持続可能な開発のための教育 (ESD) に関するコンピテンシーである形成能力 (Gestaltungskompetenz), 教科の専門に関する知識や汎用的なコンピテンシーの獲得が掲げられている⁴⁾。社会科学科カリキュラムによれば, 地理の学習目標は「省察的で, 責任感に基づいた, そして空間

に関連した行動能力を育む」ことである (Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Weiterbildung und Kultur, 2016, S.26)。先述のようにドイツの地理教育では, 「空間」が学習の中心的なテーマであり, この目標を達成するために, 学習内容として「空間」に関わる学習テーマが選択される。RP州社会科学科カリキュラム地理では, 2学年ごとに6つの学習領域 (Lernfeld) が設置され, 中等教育前期の6年間で合計18の学習領域が提示されている (第1表)。

中等教育前期6年間で始めに学習されるものが, 学習領域「ラインラント＝プファルツ州とドイツのオリ

第1表 社会科学科地理カリキュラムで提示される18の学習領域

学年	学習領域					
5/6学年	I.1 ラインラント＝プファルツ州とドイツのオリエンテーション (定位)	I.2 農業	I.3 極端な空間における生活	I.4 観光と保養空間	I.5 原材料と生産	I.6 サービス業
7/8学年	II.1 ジオファクターと生活基礎	II.2 内的営力が空間を変化させる	II.3 外的営力が空間を変化させる	II.4 空間利用の限界	II.5 余剰と不足のはざまにある世界食糧	II.6 持続可能性
9/10学年	III.1 ヨーロッパ統一と多様性	III.2 空間計画の可能性	III.3 人口発展	III.4 移住と都市化	III.5 国家とその発展可能性	III.6 グローバル化

資料: Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Weiterbildung und Kultur (2016, S.44-79) をもとに筆者作成。

第2表 学習領域「ラインラント＝プファルツ州とドイツのオリエンテーション (定位)」の概要

主要な問い/主要概念	内容—方法的提案とこれに結びつくコンピテンシー
<p>■私たちはラインラント＝プファルツ州のどこで暮らしているのか。</p> <p>■どのような空間構造がドイツを作り出しているのか。</p> <p>■何がラインラント＝プファルツ州のさまざまな地域を生き生きとさせているのか。</p>	<p>空間定位</p> <p>■RO1 地誌的知識の蓄積: ラインラント＝プファルツ州および近隣諸国, 他の連邦州ならびにドイツとルワンダの位置や大きさを記述する</p> <p>■RO5 空間認知と空間構築: 通学路を主観的に認知し, 描く</p>
<p>コンピテンシー</p> <p>学習者は獲得する</p> <p>教科専門: 上位の関係空間における自身の生活世界を位置づけ, さまざまな生活空間の基本的な空間的特徴を区別する。</p> <p>方法コンピテンシー: 現在地, 道路, 空間構造, メンタルマップに関する簡単な地誌スケッチを作成する。[M2, M5, M7]</p> <p>コミュニケーションコンピテンシー: 簡単なメディアの使用や基本概念の活用による結果を発表する。[K3, K5]</p> <p>判断コンピテンシー: 空間や生活世界のさまざまな主観的な認知について比較する。[U3, U4]</p>	<p>単純から複雑なものへの方法発展の始まり</p> <p>■地図帳と地球儀を使って活動する [M5]</p> <p>■地図帳の免許証を作成する [M5]</p> <p>■学習ポスターと簡単な地図スケッチを作成する [M7, K2, K5]</p> <p>■空中写真と地図を比較する [M5, M6]</p> <p>■インターネットによる検索を実施する [M4]</p> <p>■WebGISを活用する [M2]</p>
	<p>学校外での可能性</p> <p>■地図やコンパスを活用した身近な空間での野外調査</p> <p>■ツーリストインフォメーションへの訪問</p> <p>■都市ブランディング, 林業, 交通分野の専門家と話す</p> <p>■(地元の) 博物館への調査</p>
<p>基本概念</p> <p>地図帳, 連邦州, 地球儀, 緯度経度, 方位, 地図, 文化空間, 凡例, 縮尺, 自然空間</p>	<p>関連するほかの学習領域</p> <p>地理のなかで</p> <p>■III.2 空間計画の可能性</p> <p>■III.5 国とその発展可能性</p>

資料: Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Weiterbildung und Kultur (2016, S.58) をもとに筆者作成。

エンターション（定位）」である。学習領域「ラインラント＝プファルツ州とドイツのオリエンテーション（定位）」は15時間から構成され（Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Weiterbildung und Kultur, 2016, S.58）、本学習領域の目標、コンピテンシー・内容、方法論といった項目は第2表に示すとおりである。

本学習領域では、①「私たちはラインラント＝プファルツ州のどこで暮らしているのか」、②「どのような空間構造がドイツを作り出しているのか」、そして③「何がラインラント＝プファルツ州のさまざま地域を生き生きとさせているのか」が本学習を進めるうえでの主となる問い、あるいは主要概念として示されている。①では、RP州における自身の位置の確認と理解、②ではドイツという空間が形成される背景についての認識、③ではPR州の地域性（空間的特徴）の要因についての認識、を獲得することが意図されているといえる。

これらの目標に基づいて設定される4つのコンピテンシー（教科専門（Fachkompetenz）、方法コンピテンシー（Methodenkompetenz）、コミュニケーションコンピテンシー（Kommunikationskompetenz）、判断コンピテンシー（Urteilskompetenz））および内容一方法的提案とこれに結びつくコンピテンシー（Inhaltlich - methodische Anregungen und damit verbundene Kompetenz）が提示されている。コミュニケーションコンピテンシーを除いて、「空間」に関する言及がみられる。教科専門では、自身の生活空間（生活世界）の上位の関係空間（例えば、州、国、EU、大陸、地球）における位置づけ、多様な空間的特徴の区別が示されている。また方法コンピテンシーでは、空間構造をはじめとするメンタルマップやスケッチに関する作成が、判断コンピテンシーでは空間に関する知覚の違いについて比較することが意図されている。内容一方法的提案とこれに結びつくコンピテンシーの空間定位では、学習対象となる空間の扱い（例えば、スケール、地誌的知識、空間認知と空間構築）が、単純から複雑なものへの方法発展の始まりでは地図や地球儀、GIS（地理情報システム）といったメディアを活用した学習方法の提案が示されている。また第2表中には示されていないものの、空間を客観的・主観的に捉え分析するための4つの空間概念（Raumkonzept）⁵⁾に対する言及が地理カリキュラム全体でなされている（Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Weiterbildung und Kultur, 2016, S.21）。

加えてカリキュラムでは、本学習領域における基本概念として10語提示されている。このうち、メディアに関しては「地図帳（Atlas）」、「地球儀（Globus）」、「地図（Karte）」が、地図や位置関係を表す用語として「緯度経度（Grandnetz）」、「方位（Himmelsrichtung）」、「凡例（Legende）」、「縮尺（Maßstab）」が挙げられる。空間を表すものとして「文化空間（Kulturraum）」と「自然空間（Naturraum）」の2語がある。なお「連邦州（Bundesland）」は、空間スケールを示したものであると解釈できる。

上述からカリキュラムレベルにおいて「空間」の扱いについて、①ある空間のなかで自身の位置を確かめること、②自身の位置を確かめるために地図や地球儀、地図帳を活用すること、③学習対象である空間を主観的あるいは客観的に捉えること、また空間を文化空間と自然空間に分けて捉えること、④学習対象の空間スケールとして生活空間（学習者の身近な場所）、連邦州、国家（ドイツ、ルワンダ）、地球を設定すること、の4点に整理することができる。

Ⅲ TERRA Erdkunde Gymnasium 導入単元「自身の位置を確かめる」の概要

1) 地理教科書 TERRA Erdkunde Gymnasium の概要

RP州用地理教科書 TERRA は3巻1セットで構成され、RP州の検定を通過した教科書（教材）である（阪上, 2020a）。社会科学科カリキュラムにおける学習領域「ラインラント＝プファルツ州とドイツのオリエンテーション（定位）」に対応するのが、第1巻に収録される単元「自身の位置を確かめる」であり、生徒にとっては中等教育に入り最初に学習する地理の単元になる⁶⁾。第3表は、本単元の構成を示したものである。TERRAに収録されている1つの単元内は、「導入ページ」、「学習活動ページ」、「学習方法ページ」、「練習問題ページ」、「深める学習ページ」の大きく5種類のページから構成されている⁷⁾。また内容レベルは、分岐型の中等教育システムを採用するドイツにおいて、各学校で該当の小単元を扱うか否かの選択基準を示したものである⁸⁾。

2) 単元「自身の位置を確かめる」の全体構成

導入ページ（第3表においては割愛）では、「きつと君は自分の住んでいる周辺では位置がわかり、通学路もわかるでしょう。でも君の友達がわかるようにその通学路を描けますか。オリエンテーション（定位）は、君が習得することができる技能です。」（Wilhelmi, 2015, S.5）と示され、本単元では空間における自身の位置がわかり、説明できることを目指している。また「君の学校の周辺、君の暮らす連邦州、あるいは地球上において、地図やコンパス、GPS器具が君を助けてくれるでしょう。そしてほかのオリエンテーション手段についても知るようになるでしょう。」（Wilhelmi, 2015, S.5）とあるように、オリエンテーション（定位）の技能の習得やそのためのツールの活用も意図されている。

第3表に示したように、本単元は導入ページを除き合計で25の小単元から構成されている。本単元は「23. トレーニング」を除くと、大きく8つのまとまりから学習内容を区分することができる。

小単元1と2では、ある個人が形成する空間イメージや生活が学習対象として扱われ、また学校教育としての地理の意義についても見聞きのなかで扱われている。2つ目のまとまりが小単元3～6であり、ここでは学習者の身近な地域（学校区）や通学路が学習対象になる。小単元7～10は、RP州の特定の地域が登場するものの、

第3表 単元「自身の位置を確かめる」の構成

展開			小単元名	ページの種類	内容レベル	主な学習内容
認識・技能	空間スケール	場所				
個人や他者の持つ主観的な空間イメージの自覚, 地理を学ぶ意義を知る	身近な場所(学校区) 国家	ビンゲン	1. 一つの世界—多くの世界?	学習活動	基本	頭の中の地域イメージ, 地域イメージの多様性
		アメリカ, 日本, ドイツ	2. 世界を発見する	学習活動	基本	ユリアのアメリカ, 日本, ドイツでの生活経験
身近な場所の空間認識形成とその方法の獲得	n.d.	n.d.	3. 課題を正しく読む	学習方法	基本	課題に対する取り組み方, 回答方法
	身近な場所(学校区)	ビンゲン	4. 私が学ぶ場所	学習活動	基本	身近な場所の地図, 通学路のスケッチ
			5. 私が生活する場所	学習活動	基本	地図と通学方法
			6. デジタルな私の通学路	学習方法	基本	Google Earthを使った通学路の描写
地図の読図・地図帳の活用方法の獲得	n.d.	n.d.	7. 写真から地図へ	学習活動	基本	航空写真と地図
	n.d.	n.d.	8. 地図を読む—距離を測る	学習方法	基本	凡例を含む地図の読み方, 距離の測り方
	n.d.	n.d.	9. 等高線と断面図から	学習活動	基本	等高線および断面図の読み方・描き方
	地球	巨大隕石の落下地点	10. 地図帳を使って活動する方法	学習方法	基本	地図帳の読み方・活用の仕方
RP州における文化空間と自然空間の認識	連邦州	フンスリュックの一村	11. フンスリュックの村の生活	学習活動	基本	地域イメージの形成過程
		アイフェル	12. 森林保護官と一緒に熱い手がかりを探して	学習活動	基本	自然景観と文化景観
		RP州	13. 地図スケッチを描く	学習方法	基本	地図スケッチの作成の仕方
		特定の連邦州	14. GISとは何?	学習活動	基本	GIS
		RP州	15. 自転車ツアーを計画する	学習活動	基本	RP州の自転車ツアー計画の作成
国家レベルにおけるドイツおよびルワンダの空間的特徴の認識	国家	ドイツ	16. ドイツ連邦州と近隣諸国	学習活動	基本/発展	ドイツ連邦州や近隣諸国の概要
		ドイツ	17. 表を読む	学習方法	基本	表の読み方
		ドイツ	18. ドイツにおける景観	学習活動	基本	ドイツの山岳地域から沿岸地域に至る景観, その区分
		ルワンダ(国家)	19. 私の前に広がる知らないこと	学習活動	深化	ルワンダ共和国
	n.d.	n.d.	20. 絵を描き, 体験する	学習方法	基本	絵(スケッチ)の描き方
地球規模での定位方法の獲得	地球	地球	21. 地球上での自己の位置を確かめる	学習活動	基本	地球上における位置の特定・確定の仕方
学習の自己省察	n.d.	n.d.	22. 自己を評価し, チェックする	学習方法	基本	学習の省察の仕方
コンピテンシー, 学習内容の定着確認	n.d.	n.d.	23. トレーニング	練習問題	基本	—
地図における縮尺の活用の仕方の獲得	国家	ドイツ	24. 君のために	深める学習	—	地図(地域)の縮尺
地誌学習の方法獲得	国家	ドイツ	25. 君のために	深める学習	—	地名等の整理方法, ドイツの地誌

注: 表中 n.d. は該当する空間スケールあるいは場所がみられないという意味である。

資料: Wilhelmi (2015, S.6-55) より筆者作成。

学習の主題は自身の位置を確かめるための方法, 言い換えれば地図の読図や地図帳の活用に焦点が当てられている。小単元 11~15 は, RP 州や州内の都市・農村が主に扱われる。ここでは RP 州の空間的特徴を文化空間および自然空間に分けて, 捉えることが意図されている。小単元 16~20 では, ドイツおよび RP 州の姉妹都市であるルワンダが学習対象となり, 両国における空間的特徴の差異の認識が意図されている。小単元 21 は地

球儀の概要が示されるとともに, 地球上のある地点を特定するための概念(緯度経度, 方位, 赤道, 大陸と海洋)を獲得することを意図している。小単元 22 はこれまでのまとまりとは異なり, 子ども自身が学習行為を振り返ることを意図したものである。最後の小単元 24 および 25 は深める学習であり, 地図の縮尺を使って実際の都市間の距離を求めたり, 都市間の計算から地図の縮尺を求めたりする学習および地名等の整理方法を獲得し

たり、ドイツの地誌的知識を深めたりする学習が設定されている。

上述および第3表から、導入単元の構成上の特徴について、①地図帳の活用や地図の読み取り、地図スケッチといった地理的技能を学ぶ小単元が設定されていること、②地理的技能を学ぶ意義づけや獲得した技能の活用場面がその前後の小単元で設定され、技能の習得にとどまらず認識獲得にも活かされていること、③課題への取り組み方や学習の省察の仕方のように、学び方を学ぶ小単元が設定されていること、④主観的な空間が単元冒頭の小単元1および2で扱われていること、⑤「身近な地域(学校区)→連邦州(RP州)→国家(ドイツ、ルワンダ)→地球」というように基本的には空間スケールが拡大するように学習内容が配置されていること、の5点指摘できる。

IV 地理学習の意義や空間の捉え方を学ぶ小単元の教授・学習過程

1) 小単元1および2の分析

ここでは地理学習の意義づけや動機付けに関わる小単元1「一つの世界—多くの世界?」および小単元2「世界を発見する」を取り上げる。第4表は、小単元1および2における学習活動を整理したものである。

小単元「1.一つの世界—多くの世界?」では、学校周辺の空間(ここではビンゲン(Bingen)という町)が取り上げられる。学習活動に着目するとA)では自身の空間イメージの形成を、B)では同じ空間でも他者とは形成されたイメージが異なることの理解を、C)は景観に見られる「自然的なもの」と「人工的なもの」を区別して捉えるような見方の形成を、それぞれ目指したものである。また教科書の本文では、「学校科目地理のなかで君が獲得する地理の認識は、君のもつ印象を埋めてしまうのではなく、活用したり、その上に築かれたりするものです。君の世界は私たちにとっては重要なもので

す」と記述される。このように小単元1では、子どもたちが独自の空間イメージを形成することが促されるとともに、空間イメージの形成が地理的認識を成長させる基礎になることを子どもたちに自覚させることも意識されている。

小単元「2.世界を発見する」では、日本人の母親とドイツ人の父親をもつユリア ヒロセ・キューンレ(Julia Hirose-Kühnle)という少女の日本での日常生活が扱われる。ここでは3つの学習活動が設定される。①および②が、学習者のいる空間を軸にして、他の空間との共通点や相違点に気づいたり、他の空間に興味をもたせたりしている。また、教科書の本文では「私たちにも地理について学ぶ教科があって、社会科(Humanities)⁹⁾と呼ばれています。この教科では、私たち人間が地球上でどのように生活するか、私たちの目的のために地球がどのように形成されてきたのか、そしてさらにどのように形成するのが重要です。君たちが新たに学習する地理とかなり似ていますね」と記述される。学習活動の③はこれと対応して設定されたものであり、将来の地球のことを考えることという地理の意義を考えさせることを学習者に意識させたものである。

以上から、小単元1および2では、ある個人が形成した空間イメージや生活が学習対象として位置づけられ、自他のもつ空間イメージや生活の共通点や相違点に気付かせたり、空間を自然と人工から捉える見方を学習者に形成させたりすることが目指されていた。そのうえで、導入単元の最初に位置づく2つの小単元では、「空間イメージを形成することの学習上の意義」や「将来の地球のために意見をもつこと」といった地理学習の意義も学習者に意識させる構成になっている。

2) 小単元11および12の分析

本節では空間の捉え方を学ぶ小単元として、小単元「11.フンスリュック(Hunsrück)の村の生活」および小

第4表 小単元1および小単元2の学習活動

小単元名	見出し	学習活動	資料
一つの世界—多くの世界?	・頭の中で出来上がる独自のイメージ	①君たちの学校の近くにある空き地へ行き、君たちもつと観察したいと思うカットを選びなさい。 A) その都度、絵を描き、そこに現在位置を書き込みなさい。意味のある凡例をデザインしなさい。 B) 君たちの描いたものを互いに比較しなさい。どこが共通していて、異なるのか。 C) 景観に対する人間の影響を判断しなさい。君たちの目に映る「自然なモノ」、「自然じゃないモノ」についてそれぞれ絵のカットから選びなさい。そして選んだ理由を述べなさい。	資料1: 高台から見たビンゲンという街の写真 資料2: レア(Lea)という生徒の景観をみるまなざしの写真 資料3: 地図をなぞる生徒のイラスト 資料4: レアの描いた景観の絵 資料5: マキシミアン(Maximilian)が描いた景観の絵
世界を発見する	・Watashi no namae ha Julia desu. こんにちは、私の名前はJulia Hirose-Kühnleです。	話し合いのための提案 ①君たちの生活に対して、どこが共通していて、異なるのか。 ②どこの国を訪れてみたいか、それはなぜか。 ③私たちの惑星のよりよい将来のためにどのような考えがよいと思ったか。	資料1: ユリアに関係する国(アメリカ、日本、ドイツ)がプロットされた世界地図 資料2: ユリアの暮らす横浜の通りの写真 資料3: ユリアの生活する部屋の写真 資料4: 姉妹校訪問の写真 資料5: サッカーをするユリアの写真 資料6: 日本でユリアが好きな料理の写真 写真7: ユリアと両親の家族写真

資料: Wilhelmi (2015, S.7-9) より筆者作成。

第5表 小単元11および小単元12の学習活動

小単元名	見出し	学習活動	資料
フンスリュックの村の生活	(見出しなし)	①地図帳を使ってフンスリュックの位置を記述しなさい。 ②(本文の)文章を手がかりに、農村に暮らす人々が生活のために何を必要としているか、どのようなニーズを持っているのかを挙げなさい。 ③位置図と写真に基づいて、農村が住民のニーズをどのくらい満足させることができているかを検証しなさい。 ④君の住んでいるところこの農村を比較しなさい。	資料1: フンスリュックの位置, ラインラント=プファルツ州内の主要都市の位置をプロットした地図 資料2: ヨナサン(Jonathan) (11歳) が述べる農村での生活状況 資料3: 農村の写真 資料4: ヒルデ(Hilde)おばあちゃん(71歳) が述べる農村での生活状況 資料5: ジェニー(Jenny) (16歳) が述べる農村での生活状況 資料6: ヨナサンが描いた農村の位置図 資料7: 農村にあるお店の説明 資料8: スポーツホールの説明 資料9: ガソリンスタンドの説明
森林保護官と一緒に熱い手がかりを探して	・アイフェルの青い目	①図2と文章を使って、火山湖(Pulvermaar)の発生について記述しなさい。 ②空中写真3と地図4を使って活動しなさい: どの地域が自然的景観, 文化的景観だと君は言うのか。分類した理由を述べなさい。 ③森林保護官のテオは、「アイフェル火山はとりわけ自然空間かつ文化空間だ」と言う。この発言の理由を述べなさい。 ④アイフェルで過ごす休日の週末を計画しなさい。インターネットで情報を検索し, 日程表を作りなさい。	資料1: 火山湖の位置, ラインラント=プファルツ州内の主要都市の位置をプロットした地図 資料2: 火山湖の発生のモデル図 資料3: ギッレンフェルト(Gillendorf)近くの火山湖の空中写真(東から西の角度で) 資料4: 2万5千分の1の地形図の一部分(火山湖)

資料: Wilhelmi (2015, S.27-29) より筆者作成。

単元「12. 森林保護官と一緒に熱い手がかりを探して」を取り上げて、分析をする。第5表は、小単元11および12における学習活動を整理したものである。なおⅢでは小単元11～15を一つのまとまりとして示したが、小単元13および14では主に地理的技能に焦点を当てていること、15では地理的技能の活用を意図した内容であり、空間の捉え方を直接学ぶものでないことから、ここでは除外した。

小単元11は、RP州のフンスリュックに位置するとある農村を事例に学習が展開する。まず見開きの冒頭では「地理授業では私たちの近くで、また地球の他の場所で暮らす人々の印象を獲得します」という記述が示される。本文からわかるように、本小単元の学習に際して人々の形成する空間イメージを農村という空間を捉える際に扱うことを示している。学習活動に着目すると、①は位置関係の把握をするものであり、小単元10の学習を踏まえたものとなっている。本小単元の主たる活動が②～④である。②は農村で暮らす性別や年齢の異なる3人のニーズを視点にして、③は都市と農村の比較を通して、農村という空間を捉え、理解させようとしている。さらに④では、学習者が暮らす場所とフンスリュックとの比較が意図され、その共通点や相違点を理解させようとしている。

小単元12は、RP州にある火山湖(Pulvermaar)やその周辺地域の空間、森林保護官のテオ(Theo)が題材として扱われる。社会科カリキュラム(第2表)では、空間を表す基本概念として「文化空間」と「自然空間」が示され、この概念を学ぶのが本小単元である。ここでは4つの学習活動が設定されており、本小単元を中心となる学習活動が②および③である。「文化空間」と

「自然空間」¹⁰⁾の概念理解を踏まえたうえで、与えられた地図や空中写真の読み取りから景観を分類する活動である。さらに③ではアイフェル(Eifel)火山のもつ「文化空間」と「自然空間」の側面について、本文の記述を手がかりに説明するものであり、アイフェル火山という空間的特徴を学ぶものと捉えることができる。

以上から空間の捉え方を学ぶ小単元11および12では、異なる立場の人々の意見や印象、異なる空間機能をもつもの同士の比較、学習者が位置づく空間との比較、「文化空間」と「自然空間」といった捉え方や視点を、RP州のフンスリュックおよびアイフェル火山を通じて、学習者に獲得を目指すものである。

V おわりに

本稿は中等地理学習の導入単元の特質を明らかにするために、TERRAの単元「自身の位置を確かめる」を分析した。カリキュラム、単元構成レベル、小単元の分析から、導入単元「自身の位置を確かめる」の特質について以下の5点が指摘できる。

1つが、小単元において地理学習の意義を説明したり、あるいは考えたりする機会が設定されていることである。小単元1および2の見開きにおける扱い(本文記述や学習活動)は、他の内容や方法を学ぶことに比べて小さいものの、中等教育に入り始めて学ぶ地理について、その学習意義が示されることは意味があることであろう。2つが、地理的技能(地図や地図帳などの活用)の習得と地誌的な知識(地域認識)の獲得が組み合わせられた単元構成になっていることである。3つが、学び方を学ぶ小単元が設定されていることである。これにはコンピテンシー志向により「知っていることからでき

ること」が重視されていることが関係すると考えられ、これらの小単元は中等教育の入口において学習者に学び方(学習習慣)を意識させる役割があると推測できる。4つが空間を捉えるための捉え方や方法を学ぶことが意識されていることである。また学習の際には、自身の位置(立場)を起点に他者のもつ空間イメージや場所・空間を捉えさせており、学習対象である空間における自身の位置を意識させるものになっている。5つが、多様な空間スケールを一つの単元内で扱う構成になっていることである。

また本稿では、小単元の分析を「地理学習の意義」と「空間の捉え方」の2つの観点のみに絞って分析し、すべてを分析することができなかった。この点が残された課題である。

注

- 1) ドイツの中等教育は、第5学年(日本の小学校第5学年に相当)から始まり、進学する中等教育の学校種によって就学年数が異なる。
- 2) ドイツでは、日本と同様に中等教育の段階になって初めて、「地理」という枠組みのもとで学習が展開する。また地理を独立教科として扱う州もあれば、日本の社会科のような教科の一部に位置づける州もある。なお、初等教育の段階では、総合・統合的な教科である「事実教授(Sachunterricht)」の一視点として「地理・空間」が位置づけられている。
- 3) ドイツ各州の地理カリキュラムおよび『ドイツ地理教育スタンダード』概要については、阪上(2018, pp.58-69; 2020b)を参照のこと。
- 4) RP州社会科学科のコンピテンシーの全体図の邦訳は、阪上(2018, p.72)に掲載されている。
- 5) 4つの空間概念とは、学習対象の地域を静態地誌的に学習する視点である「コンテナとしての空間(Der Container-Raum)」, 地域における具体的な対象物の位置関係や対象物間の関係性を学習する「空間構造研究の空間(Der Raum der Raumstrukturforschung)」, 地域の認知のされ方・評価が認識主体によって異なることを学ぶ「認知地理学の空間(Der Raum der Wahrnehmungsgeographie)」, そして地域は人間や社会によって作りだされたものだと捉え、地域の形成について学ぶ「情報伝達と行動に関する要素としての空間/作られた空間(Raum als Element von Kommunikation/gemachter Raum)」である(阪上, 2018, p.49)。
- 6) *TERRA* 全体の単元構成に関しては、阪上(2020c)を参照のこと。
- 7) 各ページの詳細は、阪上(2020a, pp.61-62)を参照のこと。
- 8) 内容レベルは、社会科カリキュラム(Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Weiterbildung und Kultur, 2016, S.15-17)の例示に準拠している。
- 9) 厳密に humanities を邦訳すれば人文科であるが、文

脈を踏まえて社会科と訳出した。

- 10) 教科書では2つの概念は以下のように示されている:「自然空間」とは人間によってまったく、あるいはほとんど影響を受けない景観です。「文化空間」とは人間の生活様式(建築, 農業)によって影響を受けて、かなり変化した景観です。

文献

- DGfG Hrsg. (2017) : *Bildungsstandards im Fach Geographie für den Mittleren Schulabschluss mit Aufgabenbeispielen*. DGfG. 9. Auflage.
- Ministerium für Bildung, Wissenschaft, Weiterbildung und Kultur Hrsg. (2016) : *Lehrplan für die Gesellschaftswissenschaftlichen Fächer: Erdkunde, Geschichte, Sozialkunde*. Johnen-Druck GmbH & Co. KG.
- Wilhelmi, V. Hrsg. (2015) : *TERRA Erdkunde I Gymnasium*. Ernst Verlag Klett.
- 伊藤直哉(1998) : 地理授業における空間認識—ドイツ・ノルトラインヴェストファーレン州地理教科書『Terra Geographie』を手がかりとして—。教育学研究紀要, 44 (2), 143-148.
- 伊藤直哉(2006) : 空間形成学習による地理内容改革—NRW州教科書“TERRA Geographie”(1992年版)の場合—。社会科研究, (64), 61-70.
- 齋藤 毅(2003) : 『発生的地理教育論—ピアジェ理論の地理教育論的展開—』古今書院。
- 阪上弘彬(2018) : 『ドイツ地理教育改革とESDの展開』古今書院。
- 阪上弘彬(2020a) : ドイツの中等地理学習における防災学習の特徴—カリキュラムと教科書の検討から—。兵庫教育大学連合大学院・防災教育研究プロジェクトチーム『近年の自然災害と学校防災I—これからの時代に求められる防災・減災—』協同出版, 55-72.
- 阪上弘彬(2020b) : ドイツ地理教育における地理的コンピテンシーの特徴—初等と中等における教育スタンダードの分析から—。兵庫教育大学研究紀要, 56, 209-218.
- 阪上弘彬(2020c) : 地理における「持続可能性/持続可能な開発」の考え方の位置づけと指導—イギリスおよびドイツの中等教育前期地理教科書の分析—。兵庫教育大学研究紀要, 57, 195-205.
- 阪上弘彬・渡邊 巧・大坂 遊・岡田了祐(2020) : 「空間的な市民性教育」の研究動向とその特質—欧米の地理教育・社会科教育を中心に—。人文地理, 72 (2), 149-161.
- 寺本 潔(1995) : 小学校における児童の地理的空間認識の育成と評価。地理科学, 50 (3), 172-177.
- 服部一秀(2007) : ドイツ地理学会版教育スタンダードの地理学力像。山梨大学教育人間科学部紀要, 9, 122-146.

付記

本稿は, JSPS 科研費 JP19K02760 (基盤 C: 小中学校生
活科・社会科における空間認識形成の実態調査と指導方
略のモデル化: 研究代表者 渡邊巧) の成果の一部であ
る。